



## Ølhallenを訪れずにトロムソは語れません!

1927年9月30日、人々が気軽にビールを楽しめる大衆酒場の営業許可を再度申請したラウリッツ・ブレドループ社長は、その酒場が後にトロムソの観光名所として人気を集めることになるとは、夢にも思わなかったことでしょう。

申請書が町の議会に初めて提出される前の1924年、ブレドループは52人の議員を一人ひとり訪れ、ビールがトロムソのいたるところではなく、管理の下、屋内で飲まれるようになったら、町の飲酒状態がどれほど善くなるかということを描き、彼らを説得しました。当時、人々はしばしば「デナ(変性アルコール)」やヘアートニックなど薬局で手に入る様々な薬品をビールに加え、アルコール分を高めて飲んでいました。油を除いたヘアートニック、特にサリチルヘアートニックと呼ばれるものがよく使われ、町の飲酒状態は好ましいものではありませんでした。

あいにく議会には絶対禁酒主義者が多すぎ、彼の申請は受け入れられませんでした。町の飲酒状態は改善されず、ブレドループは議会での却下に反する意見が高まるように、辛抱強く働き続けました。

そして1927年、彼は再び議員の一人ひとりを訪れ、新しい申請書を提出したのでした。彼は営業許可の申請に、「人々のひどい飲酒状態が、ソールシェーテエン(Sørsjeteen)からネーストランデン(Nerstranden)にかけての地域で何年にも及んでいる」と援用しました。

## 1928年2月29日 ビアホール オープン

### 店内装飾

ビアホールの立地に関しては、営業許可申請の中に詳しく述べられていました。以前ビール貯蔵室だった事務所用ビル内の地下室北東部が、ビアホールに使われることになりました。店内装飾はたいへん簡素なものでした。ホールの南側でビールは提供され、そこには80cm x 80cmの質素なテーブル、周りには1脚1.25NOK(約24円)の大量生産されている平凡なイスが並んでいました。北側には、取引先への運搬に使われた廃棄樽(木製42L樽)がテーブル代わりに置かれ、より小さな小樽(21L)は腰掛に使われました。お客の中には酔っ払い、お互いの頭に向け腰掛を投げる人もおり、時々それらを取替えなければなりませんでした。

### 改装

ビアホールは年月と共にいくつかの改装を行ってきましたが、大規模なものでは、3回行いました。1回目は30年代半ば、ビアホールを地下室の西側まで拡大し、通気装置を北側の壁に移しました。また、樽の保管室とジョッキ洗浄室がそれぞれ設

けられました。2回目の改装は1949-50年にかけて行われました。以前は屋根が低く、空気はタバコと漁船のエンジンからのオイルの臭い、そして腐った魚の強烈な臭いも度々まざり、ひどく汚れていました。空気があまりにも汚れていて、2-3m先は見えないという夜もありました。そういうわけで、床を60cm下げ、より簡単に掃除ができるようにタイルを張り、外からきれいな空気を取り入れるために2台の大きな換気扇が設置されました。壁に沿ってソファを置き、ソファとイスは全て牛革製のものに替え、内装を全て新しくしました。そしてビアホールは、その当時としてはたいへん上品なパブに仕上がったのです。3回目は1970-71年にかけて建物の南と西側で大規模な、そして工場の中庭においても一部、改装が行われました。より大きな換気扇が再び備えられ、新しいビール冷蔵室も設けられました。冷えたビール管は建物の西側に移設され、蛇口までずっと引かれました。そしておそらく最も重要なのは、1973年の夏に女性用トイレが設けられたことです!!!

90年代には創業当時の、「経営者がレジに座り、お客が一杯やる前に年齢や酔っ払っていないかどうかなど調べ、入店の許可を与える」という方針がなくなりました。コンピュータ化されたデジタル計量付きレジが蛇口に付けられたのです。その結果、誰もビールの量が少ないと文句を言わなくなり、また、バーテンと仲が良いからといって少しおまけしてもらえるとということもなくなりました。

1997年のクリスマス中には、全く新しい喚起設備が再び整えられました。あまりにパワフルなこの換気扇、頭皮にしっかり付けられていないカツラを吹き飛ばすほどでした。

## 規律と秩序

帆船時代に航海士だったマグヌス・カールセンは、厳格で力強く、人々から一目置かれており、ビアホールの店員として必要な存在でした。最もよく知られていたのは、同僚のオーラヴ・アンドレアセンです。50年以上ビアホールに勤務し、ビアホールの有名人となりました。

人々は皆、オーラヴを非常に尊敬していました。彼はオープン初日からすでに厳格な管理体制をとりました。町の運営団体からの批判に対応するためには、避けられなかったのです。ビアホールでの酒類提供許可が、波止場、埠頭などいたる所、とりわけソールシェーテエなどで見られた、多かれ少なかれ変性アルコールなどの入った不審な酒を飲んでいるようなひどい飲酒状態に終止符を打つということを、行政機関に確信させなければなりませんでした。

店員は規則に従わないお客に対しての罰則を早急に決めました。お客の中には、これ以上お酒は出さないとわれ、ひどく抗議する人もいましたが、店員は断固として退店をもとめたのでした。自ら退店しない場合、原則としてドアから追い出されました。店員は記憶力が素晴らしく、以前追い出された強情な客が、数ヶ月後に小ぎれいな格好で、ジョッキで一杯と思い来店したとしても、すぐに認識できたのでした。

## 入店拒否

お客の反則レベルによっては、二度としないようにと嚴重警告を受けることもあれば、3ヶ月から12ヶ月の範囲で入店拒否と忠告されることもありました。さらに、時には“経営者の個人的判断”により、その客に入店を許可するかが決定されました。規則のうわさはたちまち町中に広がり、ビアホールでのお客の振る舞いは理想的なものとなりました。

## 個人の悲劇

ビアホールからの追放は、いわば社会から締め出されるようなものでした。知人二人—たとえば以前、スバルバール島か北極海で一緒に狩りをして冬を過ごした、もしくはフィンマルクかロフォーテン諸島、人里離れた川や湖で一緒に魚を釣った二人が、町で会うことになったとします。ビアホールで一杯やりながら話をしようということになり、ホールに向かいました。ところが二人のうちの一人が入店を拒否され、不愉快な思いを。男二人はKaffistova(コーヒーハウス)で、こんなはずではなかったのと思いながら、コーヒーをすすったのでした。多くの人が、入店を拒否されるのは人から嫌厭されるようなものだと感じ、再び入店できるようにあらゆる手段をつくしたのでした。

## 赦し

前社長のレインホルト・ブレドループは、「ビアホールのことについてちょっと話がある」という人が来ていますと、しばしば受付から電話を受けたそうです。訪問者は彼の部屋に入ると、「だんな、俺がまたビアホールに入れるように口添えしてもらえないですかねえ。間違えを犯したことは認めます。もう二度と起きないようにしますんで。本当ですよ」と、赦しを請うのでした。ブレドループは、このことはビアホールの“監督者”オーラヴに伝え、そして訪問者に通知すると約束するのでした。男は、「だんな、よろしくお願いしますよ」と言ってその場を去り、ブレドループはオーラヴに電話し彼の考えを聞くのでした。するとオーラヴは、「そうだなあ、あの男、長い間入店拒否を受けてるから、ここらで試しに入れてやるとするか」あるいは、「いいや、あいつは腹立たしい、顔も見たくないね」などと返すのでした。そしてブレドループの答えはいつも「わかったよ、オーラヴ。君の言うとおりにするさ」でした。

## 語り上手な人たち

ビアホールはたちまちトロムソの人気の集まり場となりました。ビアホールはまた、口うるさい女性たちから逃れられるありがたい場所だったので。というわけで、ビアホールでは語り手たちが急速に花を咲かせました。多くの人たちがしばしば現実離れした体験談などを作り上げ、また巧妙で抜け目のない語り上手がたくさんいました。時にはまるでメロドラマのような「次回につづく…」的物語となっていて、一部ごとに自然な流れで話は終わり、第一部が終わると語り手は誰かがビールを一杯ごちそうしてくれるのを待ち、ごちそうになると第二部へという具合に話は進むのでした。もし、誰もビールをごちそうしてくれなかったら、その日の話はおしまい。語り手は続編が興奮を呼び起こすなどとはほのめかすのですが、おそらく次の日までお預けとなったことでしょう。最も有名な語り手は、おそらく、「北極熊王」と

して名の知れた猟師ヘンリー・ルーディで、隠居生活の多くの日々をビアホールで過ごしていました。

## 女性の来店

ビアホールは、「人々が屋内の秩序ある環境の中、ビールを楽しんで飲める場所」となりました。しかし、“人々”とは今日とは幾分違った意味を示していました。昔のビアホールには、女性の存在は全く考えられませんでした。そこは男たちが商売人からも奥さんからも邪魔されない、“安らぎの場”だったのです。ビアホールに一旦足を踏み入れたなら、ビールを楽しまなければなりません。もちろん、女性たちは急にサインや小銭が必要になったり、ちょっと一言と思えばホールに出向くこともありましたが、そんな時女性は、新しい客が来店するまで外で待つしかありませんでした。そして、「アマンドゥスに、家内が食料雑貨店主に先週分を支払わなければならないので、お金をもらいに来たと言付けを」などと頼むのでした。そして、アマンドゥスが現れてくれることをただ願うのでした。ビアホールへの女性入店禁止は当初からの慣習でした。時には好奇心の強い女性が一人や二人、ドアの中の様子を窺うこともありましたが、男性の常連客たちから受ける即座の視線に、その場をすぐに去るべきだという気持ちにさせられたのは確かでした。

1970-71年にかけての改装で何をすべきかとなった時、ビアホールの男性常連客たちは女性用トイレについてなど耳も傾けませんでした。安らぎの場であるビアホールを破壊することになると、多くの人が主張しました。そこで経営者は、「新しい男性用トイレを造ろう、これには異議はないだろう。それが出来上がったら、古い男性用トイレを女性用に充てよう」と解決策を見出し、それが現在のトイレとなったのです。多くの男性は、それでもこの展開に不満を抱いていましたが、客足は相当に伸び、ビアホールは革新を得たのでした。

## はしご酒

ノルウェー中に知られるようになった「はしご酒」。Ølhallen ははしごの出発店となり、数えきれないほどの人がここから飲み始めました。金曜日には人々がホールに集まり、夕方や週末の集まりの必要な段取りをつけました。外の行列は長くなる一方。冬でさえ週末のためには並ばなくてはならなかったのです。

テキスト： テリエ・ヨハンセン